地域創造における聞き書きの活用

―セミナー「『聞き書き』を用いた地域づくりの可能性」に参加して―

亀　山　恵理子

はじめに

本稿は、2014年12月13日に名古屋市立大学で開催されたセミナー「『聞き書き』を用いた地域づくりの可能性」について報告するものである。一人の人からじっくり話を聴き、その人のこれまでの暮らしや人生に想像力を働かせ、語られた経験から社会を理解していこうとする「聞き書き」は近年地域づくりや教育の現場で活用されている。筆者は、オーラルヒストリー学会のメーリングリストでセミナーの開催を知り、今後の研究・教育活動に聞き書きを活かしたいと思い参加した。以下では、セミナーの趣旨とパネリストの報告の概要をふり返り、質疑応答の内容を地域創造における聞き書きの活用にしぼって報告する。なお、ここに報告した内容は筆者自身の関心をおのずと反映するものであり、セミナーにおけるすべての内容を記したものではないことを始めにことわっておきたい。

1．セミナー「『聞き書き』を用いた地域づくりの可能性」について

セミナーは「グローバル社会を歩く研究会」（名古屋市立大学・大学院人間文化研究科「グローバル社会と地域文化」）の主催によるものである。案内文によると、今回のセミナーは「聞き書き」や「まち歩き」という手法を用いて、地域の問題や魅力を発見し、それらを地域づくりや人材育成につなげるための手法や課題を議論する機会として開催された。また、地域づくりや地域おこしにおける「問題」や「地域資源」を見出すための調査方法として、質問票

によるアンケート調査ではなく、「聞き書き」や「まち歩き」など多様な人びとが参加できる質的調査の可能性を追求することも意図されたものだった。

聞き書きとは、対話を通じて「話し手」の人生や価値観を引き出し、記録する作業である。具体的には、「聞き手」は「話し手」の言葉を録音し、一言一句を書き起こし、語り口を生かしながら文章にまとめる。よって聞き書きの作品は、その人が自ら自分の人生を語っているようなスタイルに仕上がる。経験や知恵、これまでに培ってきた価値観や考え方とともに、その人の人柄が浮かび上がるものとなる。

冒頭の趣旨説明で宮内泰介氏（北海道大学）は、聞き書きとは人の話を聞いて書くというシンプルな営みであり、近年はその効果や意義に多くの人が気付き始めていると述べた。聞き書きは、記録としてのほかにも環境保全、まちづくり、保健・医療など複数の目的をもちうる。たとえば、国連大学のSATOYAMAイニシアティブは、自然共生社会実現のための手法として聞き書きを位置づけ、普及につとめている[1]。また、聞き書きの効用として、人と人が出会うこと、地域の発見が促されること、聞き手と話し手がお互いに成長すること、経験が伝えられることが挙げられる。さらに聞き書きには、人の話を聞いて書くという営みがその後の何らかの行動につながるという副産物がある。

今回のセミナーの参加者は、教員や学生など大学関係者のほかにも、NPOなどの市民団体で活動する人や行政職員、関心をもつ個人などさまざまな人が集まっていた。正確な人数はわからないが、100人程度入れる講義室がほぼ埋まる盛況ぶりであった。

2．パネリストの報告

セミナーでは趣旨説明のあと、四人のパネリストの報告が行われた。

2－1　聞き書きから生まれるつながり

一人目の報告者である吉野奈保子氏（共存の森ネットワーク）は、「『聞く』ことから『つながる』―聞き書き甲子園の取り組み」と題する報告の中で、

「聞き書き甲子園」というユニークな活動とその効果を説明した。吉野氏は、2002年からNPO法人樹木・環境ネットワーク協会のスタッフとして「森の聞き書き甲子園」実行委員会事務局を担当した。2007年からは聞き書き甲子園卒業生とともにNPO法人共存の森ネットワークを設立し、現在は事務局長をつとめている。

2002年から始まった「聞き書き甲子園」とは、毎年100人の高校生が「森の名手・名人」や「海・川の名人」を訪れて、「名人」の知恵や技術、ものの考え方や生き方を聞き、記録する活動である。高校生が話を聞く「名人」は、造林手、炭焼き、船大工、木工職人、漁師など長年自然と関わりながらその恩恵を受けつつ仕事をしてきた人びとである。戦前生まれの70代から90代にいたる人がほとんどである。毎年農林水産省が各分野に関連する民間団体を通して「名人」を選んでおり、高校生はそれら名人のもとにひとり聞き書きに出かける。

参加高校生は、実際の聞き書きに出かける前に、プログラムの運営主体であるNPO法人共存の森ネットワークによる事前研修を受ける。吉野氏は、聞き書きは一対一の対話であり、相手の気持ちに寄り添いながら言葉を聞き出していく営みであると述べる。事前研修では、細かい部分や具体的な部分を大切に、決してわかったつもりにならずに話を聞き続ける大切さを伝えるという。質問の仕方についても、「おじいさんにとってこの仕事の生きがいは何ですか」と直接聞くのではなく、「山からどのようにして木を切り出し、どうやって運んでいるのか」と具体的な事柄を聞くように参加者には指導する。

高校生たちは名人のもとから帰ってくると、録音した言葉を一言一句書き起こして文章にし、聞き書きの作品を仕上げる。共存の森ネットワークは聞き書きの作品を冊子にまとめるとともに、インターネット上の電子図書館でも公開している。一方、「聞き書き甲子園」の取り組みは記録だけに留まらなかった。名人の言葉に心を動かされた高校生たちのなかには、「聞いただけで終わりにしたくない」とグループを組織して日本各地の農山漁村に入り、里山整備や棚田の保全、藻場の再生活動などに取り組んでいる人がいる。たとえば、「山が泣いている」という名人の言葉を聞いた参加者は、名人のため

に何かをしたいと思い、共存の森ネットワークを立ち上げた。高校生、大学生が中心となり、里山保全活動や地域コミュニティ再生に向けた活動を行っている。共存の森ネットワークの東海チームは、愛知県豊田市椿立自治区をフィールドに、地域の人の話を聞きながら竹林の手入れや休耕田を借りて米作りを行なうことによって持続可能な暮らしとは何かを学んでいる。

2－2　よそ者による聞き書きと地域の魅力

二人目の報告者である清藤奈津子氏（山里文化研究所）は、「山里の聞き書き―村の魅力を村の人に伝える贈り物」と題する報告の中で、山里文化研究所による聞き書き活動のしくみや活動で生まれるものについて報告した。清藤氏は、都市に暮らす人びとや若者が学ぶ場である「山里の聞き書き塾」を2008年から行っている。聞き書き本の刊行や聞き書き活動の支援のほかにも、食の文化祭などで山村の魅力を発掘する活動をすすめている。

山里文化研究所が行なっている聞き書き活動は、農山漁村の暮らしから人と自然のかかわりのありようを学ぶものである。都市部に暮らす人が農山漁村を訪れるという都市山村交流によって地域の本をつくることが特徴である。ひとつの地域で10組から15組程度の聞き書きを行い、一冊の本にまとめて刊行する[2]。聞き書きをする参加者はプロジェクトごとに募集され、よそ者、若者が中心である。これまでに岐阜県、長野県、愛知県の農山村で聞き書きを行なうほか、他団体が他の地域で行なう聞き書きを支援してきた。他団体には、聞き書きを行って地域の本をつくりたいと考えている町や村などの地方自治体やNPOが含まれる。

聞き書きの活動は次の流れですすめられる。まず始めに、1泊2日の聞き書き塾において、参加者は聞き書きの意義や方法を知ると同時に、聞き書きする地域を訪れて地域を知る。同時に参加者間の親交を深める。その後、各自の意思で1回から4回程度の聞き取りを行なう。1回の聞き取りは1時間半程度であり、事前の日時調整については参加者が話し手に直接連絡をとる。聞き取りが終われば各自が自宅で執筆する。第一稿が提出されると書き手である参加者が集まるワークショップが開かれる。山里文化研究所が編集者と

なり作品づくりを指導し、書籍として刊行する。刊行された書籍を話し手に贈呈し、感謝の気持ちを伝える発表会を地域で行う。

清藤氏は、これらの活動から生まれるものとして次の三点を挙げた。一つは学びである。山里文化研究所は、一対一で行なう聞き書きを情報収集や調査ではなく、人の生きる姿から学ぶ機会と捉えている。聞き手である参加者にとって、話を聞くことはあることを知る、感じる機会となり、また書くことで考える機会にもなるという。聞き書きという活動は話し手の生きざまを敬う作業であり、記録よりも対話のプロセスに価値が見出される。二つ目は交流である。それまで興味をもっていても山村を訪れるきっかけのなかった人が聞き書きを通じてある地域と出会い、その後その地域は聞き手にとって「また訪れる場所」、「また訪れたい場所」となっていく。三つ目は、地域の魅力を発見したり、地域を元気づけたりすることである。山里文化研究所は、本をつくることを話し手と地域へのお返しとして位置づけている。本を作ることは人と地域に新しい光をあてることであり、地域の姿をさまざまな生業や暮らしから描き出す聞き書きの本の中身は、話し手や地域にとってはよそ者によって発見された魅力である。

2－3　地元の人びとによる地域を見つめる聞き書き

三人目の報告者である中山清美氏（奄美群島文化財保護対策連絡協議会）は、「地域コミュニティ―シマ（集落）学・奄美遺産の取り組み」と題する報告を行なった。中山氏は考古学を専門とし、公務員として文化財行政に30年間たずさわってきた。定年退職後は、在職期間中には十分にできなかったという文化財と地域コミュニティをいかに結びつけるかという課題に取り組んでいる。具体的には、奄美群島の「シマ（集落）遺産調査」や地域の歴史を調査する高校生の聞き書きサークル活動を行なっている。

奄美群島の歴史と文化は独自のものを形成してきたとされ、それぞれの分野からの調査研究が近年さかんに行なわれている。中山氏のすすめる奄美遺産の取り組みとは、既存の文化財の分類枠をはずし、シマ（集落）遺産を奄美群島独自の「奄美遺産」として位置づけようとするものである。つまり、

公式な文化財の定義や分類にとらわれずに、自分たちが畏れ、敬い、守り、伝え、残したいものや残したいことを群島全体で奄美遺産と認定する。自分たちのシマがどこに行こうとしているのかを、足元にあるシマ（集落）遺産に学び、地域コミュニティとして世界遺産とも連動する取り組みを模索するものでもある。

「シマ（集落）遺産調査」や高校生の聞き書きサークル活動では、目に浮かぶ風景や懐かしい味、伝統行事、仕事、島での生活でつらかったことや楽しかった場所、おそれる場所、伝え残したいもの、世界自然遺産、文化的景観などを調査項目として、赤木名地区に住む「名人」に話を聞く。このうち文化的景観とは、地域における人びとの生活、あるいは生業や地域の風土により形成された景観地を指し、人びとの生活や生業の理解に欠くことのできないものである。よって、「名人」の家を訪問し、伝統的な食材、味や香りを学ぶことも遺産調査の一部となる。聞き取りの内容をパソコンで編集し、地区の聞き書きノートを作成するところまでが調査作業である。

2－4　大学の教育活動としての聞き書き

最後に赤嶺淳氏（一橋大学）が「地域と大学をつなぐ―「おきひゃく」の展望と課題」と題する報告を行なった。赤嶺氏は東南アジア研究、海域世界論、食生活誌学を専門とし、近年能登、隠岐、壱岐などでの「聞き書き」の実践を学生とともに行なってきた。

「おきひゃく」とは、隠岐諸島に暮らす100人の個人史を聞き書くことを目的としたプロジェクトである。若者から年齢を重ねた人びとまで幅広い世代を対象とし、さらに地元で生まれ育った人だけでなくIターンで移住した人も対象に含まれる[3]。地域社会のあるべき将来像を語り合うにあたっては、その社会に暮らす人びとが歩んできた歴史を人びとの生活誌から紡ぎなおし、「わたしたちの歴史」を共有する作業が必須となる。「おきひゃく」が目指すのはそうした地域社会の遺産ともいえる多様な個人史の記録であり、その共有化でもある。また、聞き手と話し手は地域史を編む過程で地域の未来を見据えることになり、さらに聞き手にとっては人生のプロに生き様を学ぶ機

会ともなる。

「おきひゃく」における聞き書きは、次のような流れで行なわれる。例えば、隠岐諸島の海士町における聞き書きでは、現地滞在中に食を育む環境と文化について考察することを目的としていた。まず現地に到着すると、環境と生業について町内探索をする。海の幸を満喫しながら環境と開発について議論を行う。そのうえで、翌日には聞き取りを行なう。1時間程度の聞き取りであるが、話の流れによっては2時間程度になることもあるという。その日のうちにテープおこしをして、翌日には発表会に向けて模造紙1枚に聞き書きのポイントを整理する。また町の体育館で行なわれる懇親会に参加し、町の人びととの親交を深める。最終日にはふりかえりのワークショップを行う[4]。

「おきひゃく」は大学の教育活動としてはじまり、聞き書きの第一の目的は教育である。参加学生にとって「おきひゃく」はフィールドワーク技術を学ぶ機会であり、まちづくりや地域づくりへの参加型学習の場となっている。また、聞き書きにおいては、「聞く」ことのほかに「書く」という作業も重要な部分を占める。作品化においては最後のチェックを教員が行う。読み手を意識した文章を書くという経験を経て、参加学生には新聞を批判的に読めるようになるといった変化がみられるという。加えて、「おきひゃく」では聞き書きの内容は一般に流通する書籍として作品化されるため、ライター経験の場ともなっている。さらに、学生にとっては話を聞くという出会いを通して、他者の生き方や生き様を学び、自分の将来の仕事について考える場でもある。

展望と課題としては、以下の点が挙げられた。まず、心から「面白い」と感じれば学生は自ら主体的に動くと赤嶺氏は述べる。何とか学生を連れ出し、そこで面白いというきっかけを与えれば、その後は主体的な動きが生まれる。「おきひゃく」には主体的な学びにつながる可能性がある。また、身の丈にあった持続可能な企画であるかをふり返る必要性が指摘された。実施するための予算に加えて、実施時期や宿泊、食事の点から現地の受け入れキャパシティを越えないことが肝要である。さらに個人史が自らの暮らす社会で共有されることの意味を考える必要がある。作品化の過程においては、「話し手」である人びとに原稿を送り、内容をチェックしてもらう。その際に加

筆修正が増えてくることをどう捉えるべきなのかは引き続き考えなければならない。

加えて、今後の展望と課題について、報告の中で印象的だったのは大学と地域との関係についてである。大学の地域貢献が求められる時代において、赤嶺氏は「社会貢献」と簡単に口にしていいのだろうかと述べる。大学の地域貢献と呼ばれる活動においては、大学が与えるよりも地域から奪っている方が多いのではないかと疑問を投げかける。地域の人びとが大学の教育活動に協力しているという状況を、ある大学教員は「地域の大学貢献」と呼んだそうだ。赤嶺氏は、大学と地域とのかかわりにおいて、地域の人びとに楽しんでもらえるプロジェクトを企画できないか、また、傲慢に陥るのではなく、過度に卑下するのでもなく、対等に持続的な付き合いを目指したいと述べた。

双方に益のある対等で持続的な付き合いを具体化するためには、まず海士町での聞き書きの経験を「一期一会の出会い」ではなく、両者のより継続的な関係性を重視し、語り手を育んだ生業、環境、地域などへの理解を促進するものと認識する必要がある。赤嶺氏は、複数回の対話による語り手との共同作業を重視するプログラムに組み替え、海士町をそれぞれの地域や日本の将来を構想しあえるフィールドにしていけないかという構想を語った。

これら4つの報告のほかに、愛知県高浜市役所文化スポーツグループが、現在すすめようとしているまちづくりの構想を紹介した。まちづくりの中でどのように聞き書きを活かせるのかを学びに来たという職員の方々は、聞き書きの手法を使って町の魅力を発見、発信しようという「タカハマ！まるごと宝箱」プロジェクトを説明した。高浜の魅力となるモノ、コト、ヒトを箱に入れて受け継いでいくことを意図するプロジェクトでは、高浜らしい聞き書きを追求している。高浜らしい聞き書きとは、先人を見つめ、土地の記憶を引き継ぎ、町の魅力・価値を再認識し、町の誇りにつながるものであるという。

３．質疑応答

以上の報告の後、4人のパネリストと会場の参加者らの間で質疑応答が行

われた。パネリストだけではなく、参加者の経験も共有できる非常に活発なやり取りが交わされた。ここでは地域への還元、聞き書きの手法、作品化に関する3つの質問を取りあげる。

3－1　地域への還元について

まず、「聞き書きの成果をどのように地域に還元できるのか、つまり地域のために何ができるのか」という問いである。これについては、以下の見解がパネリストより提示された。

学生とともに隠岐諸島で聞き書き実践を行う赤嶺氏は、その地域で何ができるかは「自分がそこでいかなる関係性をつくれるか」ということであり、自らの関心と責任を考えなければならないと述べた。また、自分が何かをしたり、その地域に直接的に貢献したりすることがなくとも、聞き書き活動を巣立って行った人が異なる場所で何かを始めているケースはある。例えば、卒業生が岐阜県で地域おこし協力隊に参加している。高校生による聞き書きをすすめてきた吉野氏は、聞き書き活動の卒業生である大学生が何かを行ったりしているが、自主性に任せているため100人の話し手に対して同じように還元できているわけではないと述べた。聞き書き活動の還元については、参加者が何を感じて、その人の後の人生にどう生かされているのかという長期的な視点からみることもできる。

地方自治体からまちづくりへの参画を依頼されて地域にかかわるようになった経緯をもつ宮内氏は、聞き書きは地域に関わらせてもらう際に、学生と教員、地域の関係者が接触するインターフェイスとなりうることを指摘した。聞き書きが始まると、その後学生と教員の間から何らかの活動が生まれたり、あるいは地域の人が自発的に動き出したりするという。清藤氏は、山里文化研究所は聞き書きの先にある部分は手がけていないと述べた。色々なことに手を出すことになるため、あくまで本を作ることを本分としている。ただし、聞き書きは地域づくりのための地盤固めになるのではないかと考えており、地域づくりの営みのなかでその部分を担当する可能性はある。あるいは、地域の人が本を読んで地域の魅力に気づき、聞き書きにかかわった人

が何かを立ち上げる可能性もある。

3－2　聞き書きの手法について

二つ目の問いは、「地域のなかで聞き書きを行なうことのよさとやりにくさは何か。聞き書きはよそ者がやった方がいいのか」である。この点については、パネリストだけではなくフロアの参加者もそれぞれの経験を語った。

まず、学生とともに聞き書きを行なってきた宮内氏は、誰が話を聞くのがよいのか、一人がいいのか複数がいいのかは、そのときの状況によると述べた。北海道のある自治体で総合計画を作るための調査として聞き書きを依頼された際には、学生と町民がペアになって町民に話を聞く方法をとった。学生だけだと大したことが聞けないこともあり、逆に町民だけだと内輪話になってしまう。ペアを組んで町民に話を聞くようにすれば、それらを解消できると考えた。聞いた話の文字おこしは学生が行うが、人選はなるべく幅広い年齢、来歴、性別になるように依頼したうえで自治体に任せた。

フロアの参加者からは、以前小中学生による山崎川についての聞き書きを行い本にしたが、同じことを他の地域で行っても盛り上がらなかったという経験が伝えられた。「おじいちゃんと小学生」という組み合わせが山崎川では盛り上がりを助けたが、他の地域では同じようにはいかなかったという。これについて背景を知る他の参加者からは、山崎川についての聞き書きでは地域に強い動機をもつ人がいたが、他の地域ではそうではなかったことを指摘した。このやりとりを受けて宮内氏は、面白がる人、一緒にやりましょうと言ってくれる人がいるとよそ者も一緒に活動できる、その地域から呼ばれて始めるという形が一番いいのではないかと述べた。中山氏は、聞き書きを行う際には公民館で開かれている老人クラブに出向くこと、すなわち老人クラブの有効活用をよびかけた。

3－3　作品化のプロセスについて

三つ目の問いは、「どのように作品化するか、どのように公表するか」というものである。東日本大震災後に被災地で聞き書きを行なった経験のある

参加者からは、「一年目は全国の人びとに対する感謝の気持ちが述べられた。二年目は、もっと個人的で具体的な話が聞けたが、公表はしないでくれと言われた。そのため個人史としてお返ししたのみである」という体験が伝えられた。これに関連して赤嶺氏からは、作品化した聞き書きの原稿を話し手に送ると、自分で書いた原稿を返送してきた人がいたという体験が伝えられた。当時は電話で趣旨を説明して説得したが、作品化の際に自ら創作する話し手には、聞き書きが何を目的としていたのかを相手のもとに赴いて話す必要があるという。社会的地位のある人がここは触れないでほしいという場合もあれば、配偶者が書き換えてきたケースもあった。何のための聞き書きかを事前にもっと説明しておくべきだったと思うが念書をとることはしない、それよりもお互いの理解を深めることを優先したいと赤嶺氏は述べた。

相互の理解を深めることを優先するとの見解は、他のパネラーからも伝えられた。清藤氏は、本をつくる、資料として残す、聞くなど、どこに聞き書きの目的をおくのかを行う方の側で明確にすることを強調した。また、書かれたものを読み、話し手が「このことを伝えたい」と思うかもしれないし、逆に書き手の方が「このことを伝えたい」と説得することもありうる。その過程が大事であると述べた。宮内氏は、聞き書きを作品化する際に、結果的には話し手がかなり文章に手を入れて、話し手と聞き手との合作が生まれたケースを紹介した。また、聞かれることによってインスパイアされ、戦争開拓団について話し手が自分で別稿を書き、もう一つの作品が生まれたこともあったという。

おわりにかえて

以上、セミナー「『聞き書き』を用いた地域づくりの可能性」の内容を報告した。パネリストの報告と質疑応答の中で述べられているように、人の話をじっくりと聞き、それを文字にして作品化する聞き書きは、「地域創造」、すなわち地域を活性化し、人びとが豊かな生活を享受できる地域社会を築くことにおいて十分に活用されうるものである。聞き書きを行なったからといって地域が活性化するわけではないが、その後に何らかのつながりが生まれた

り、それを基盤として何らかの行動が生み出される可能性がある。また、地域づくりは地域に暮らす人びとがその土地の魅力に気づき、誇りをもつことから始まるのだとすれば、聞き書き活動それ自体も地域づくりに十分に生かされうる。

最後に、大学時代に聞き書き活動を経験し、卒業後は他県の山里に地域おこし協力隊として赴任する道を選んだ柴田沙緒莉さんの言葉を引用したい。

> 地域おこしという大きなテーマに挑むとき、よそ者であれば特に、小さな「対話」が第一歩になる、と感じている。「させていただく」という姿勢は、私が海士での聞き書きを通して大切にしていきたいと思ったことのひとつである。謙虚な気持ちをもって、地域の人々からお話を聞かせていただく。その段階を飛ばしての地域おこしはありえない。そういった意味で、聞き書きというのは単に「人の語りを残す」という作業ではなく、地域おこしの土台そのものにもなりうると私は考えている。
>
> 私が暮らす地域には、「よくこんななにもないところに来たね。私なんて出ていきたいくらいなのに」と冗談めかして話す人もいる。郷土愛やその人の活躍ぶりについて伺うことだけが聞き書きではなく、田舎特有の「生きづらさ」も含めてその地域の姿なのであり、その人の人生なのである。そういった部分も汲み取ってこそ、地域おこしの鍵が得られるはずだ（柴田2015：194）。

聞き書きという経験は、地域を理解するためにも、また地域によりよい変化をもたらす行動をとるためにも大事なことを教えてくれる。それは、地域理解という目的のためであれ、地域活性化という実践的な目的のためであれ、地域に暮らす人びととその場でいかにかかわるのかということである。

註

1　自然環境を持続可能な形で保全していくためには、世界各地の自然利用のかたちと社会システムのあり方を収集、分析し、幅広く発信すると同時にそれらを再評価する必要がある。国連大学のSATOYAMAイニシアティブは、そのためのひとつの手法として「聞き書き」を位置づけている。

2　本の一例を挙げておく。山里文化研究所編『篠島―海こそすべて』（NPO

法人山里文化研究所、2008年）は、愛知県篠島で生まれ暮らす14人の人びとに、12人の島外者が話を聞いてまとめたものである。同書からは、陸上の環境問題のあおりを漁民が受けていることや、海や貝に満ちたかつての海の様子、島じゅうが家族のようだった暮らし、今も漁業で活気のある島の姿などがわかる。具体的に漁業や海の幸については、戦中から昭和20年代の漁のこと、こうなごすくい、昭和20年代の鯛網、昔の磯の恵み、海の幸の料理法、漁船への爆撃、サメによる事故、海苔養殖業の今と昔、現在のシラス漁、今と昔のシラス加工、値の低下が取りあげられている。また、暮らしや習俗については、宿（若衆宿）、娘遊び、念仏婆さんによる葬送、正月の祭り（お渡りさまとおたなぎさん）、環境については、三河湾の埋め立て、中部国際空港建設、長良川河口堰運用、ダム、中山水道浚渫以降の漁の変化、アラメ（海藻）の激減に関する事柄が語られている。

3　海士町は総人口2370人のうちIターンが14％を占める。海士町におけるIターンの定着率は7割であるという。

4　「おきひゃく」では海士町でまちづくりや人づくりを行っている株式会社巡の環が現地コーディネーターとしての役割を担っている。巡の環のネットワークを通じて聞き書きに協力する話者を募っている。巡の環が関わっていることで、参加学生にとっては、聞き書きのための海士町滞在は働くことや社会起業についての参与観察の機会ともなる。

参考文献

柴田沙緒莉（2015）「小さな一歩から未来へと」赤嶺淳・佐野直子編『海士伝3　海士に根ざす―聞き書きしごとでつながる島（グローバル社会を歩く⑨）』新泉社、191-195頁。